

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

コメント

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4575

【コメント】

須藤健一（神戸大学大学院国際文化学研究所教授）

*二〇〇九年四月より国立民族学博物館長

ただいま紹介していただきました、須藤と申します。

今日の四人の先生のご発表を聞いていまして、ある共通した視点、ないし方法論、取りあげ方があるように思います。それについて、私が考えましたところをこれから述べていきたいと思います。

シンポジウムの冒頭で上杉さんは、ウォーラーステインの世界システム論、つまり中央と周辺と対比されているような構図の中で、周辺に位置づけられるであろうローカルな場にいる人々が、グローバリゼーションの動きによって生じた社会的・文化的な非対称性・不均衡性というものに対して対抗し得る何かがあるのか、あるいは対称性・均衡性を回復し得るのか、そういう非常に大きな問題を提起してくれたと思います。

上杉さんは、ユネスコの無形文化遺産への登録を試みる日本の志摩半島の海女が、韓国済州島の海女と直接交流を持つようになった例をあげまして、国家とか地球規模ではなく、ローカルな場にいる海女同士が国境を越えた交流・協力関係を創り出す動きを、周辺におけるグローバリゼーションに対抗する一つの営みだというふうな問題提起されたかと思えます。

そういう上杉さんの問題提起に対して、今日発表された四人の先生方全員に、まず、グローバリゼーションの進行の結果生じた社会的・文化的な非対称化や不均衡化というものを将来的にどう捉えていけばよいのか、あるいは、そうしたものに対してローカルな人々は対抗ないし回復が可能なのかどうかを



須藤健一氏

答えていただきたいというのが、コメンテーターとしての私からの一つ目のお願いでございます。

発表についての全体的なコメントは以上の通りですが、次に、それぞれの発表についてコメントをしていきたいと思えます。

伊豫谷さんの発表につきまして、グローバルゼーションの動きを先取りした形で行われている海外移住や移民の問題に焦点を当て、それを非常に大きなマクロの視点とミクロの視点の両方の視点から捉えることが必要だということをご説明いただき、私もいろいろと考えさせられました。二〇〇八年当時のデータによると、一〇億人にはまだ達していないと思いますが、現在、少なくとも九億人ぐらいの人々が世界を移動しています。伊豫谷さんも述べていましたが、その中で一年以上海外に住んでいる者の数が一億九〇〇〇万〜二億人いるわけですね。そういう人々をどう捉えるのかということが、伊豫谷さんの今日の発表の中心的テーマだったと思えます。それに関して、私の方からは二つコメントしたいと思います。

一つ目のコメントは、グローバルとローカルというものを見る場合に、特にグローバルというものはどういう場面において見たらいいのかということについてです。伊豫谷さんは、グローバルとローカルが共振、シンセサイズする場面ないし接点において何が起きているのかということをまず見なきゃいけないということを話されました。そこでは、伊豫谷さんの言葉で言うならば、様々な出会いによって「切れ目」とか「裂け目」とかが生じている。私たちは、それを直視しなければならず、それを通して、ローカルとグローバルという人々の営みがはつきりしてくるのではないか、とのお話でした。

移住していった人々というのは、移住先において、社会的な差別の壁、法的な居住権を取得し得るか否かの壁、それから文化に適應できるかどうかといったような壁に直面しながら移住先の社会

に定着していくわけですね。この過程で起こる問題が、伊豫谷さんの提起した問題です。

こうした問題について、伊豫谷さんは続けて、移民のコミュニティとかネットワークの形成という具体的なことについてお話しして下さいました。移動の場において作られる移民のコミュニティ、こういうものがローカル化していく、そういうことこそをpushしなきゃいけないんだというご指摘であったと思います。グローバル・コミュニティやグローバル・シティなどというような経済的・金融的な「中心」には世界中から融資が集まるわけですが、そこにもローカル出身者のコミュニティができるんだ、そういうところにも目を向けなきゃいけないということをおっしゃいました。

そこで、もう一つのコメントになるのですが、そういうコミュニティが形成されるのは事実として、そのコミュニティに住む人々がそこを永住の場とするかどうかということが次に問題になると思います。伊豫谷さんは先ほど、今、移民の人達に「居場所」が無いということが起こっていると仰いました。私も太平洋の島々の人がアメリカに移住したり、オーストラリアに移住したり、ニュージーランドに移住したりという現象を調査してきました。彼らはいったん島を出、国を出た後、たしかに、移住先で自分たちのコミュニティに入ります。しかし、そこから、例えば、ニュージーランドから、オーストラリアの経済が良くなるとオーストラリアへ、さらにアメリカの景気が良くなるとアメリカに移っていく。つまり、居場所というものを固定しないで、常に動くということが常態化しております。

私はこういう状態を「移住の日常化」と言っております。この点については、上杉さんや栗本さんは、トランスナショナルリズムやトランスナショナルリティという言葉で触れられていたはずですが、いずれにせよ、移住の現場では、こういうトランスナショナルリズムというような現象が起こっており、そういう居場所の無い人々の、実際の生活の場での声を聞かなくてはいけないということを、伊豫谷さんは言って

おられます。まったくその通りで、移住する人々の生きられた経験というものが非常にローカルであるということ踏まえた上で、ローカルな場に視点を向けた研究というものが非常に重要になってくるんだと思います。そうした研究を通して得られたデータというものが、これからはグローバル研究にとつて、非常に重要な意味をもつてくると思います。

以上二つの点についてコメントを述べましたが、先ほども言いましたように、伊豫谷さんには、ローカルな立場の人々、つまり居場所の無い人々が、グローバル化によって生じた社会的・文化的な非対称性をどう回復するのか、あるいはそもそもその可能性があるのかという点について、ぜひともご意見を伺いたいと思います。

次に、前川さんの発表についてコメントいたします。司会の大杉さんの方からすでに紹介がございましたけれども、前川さんは、『グローカリゼーションの人類学』という本を刊行し、その中で、オーストラリアのトールレス・ストリート諸島の人々の例を出しながらグローカリゼーションについての見解を述べられています。前川さんは、本の中で、外から来る強い、支配的な文化、ないし社会・制度・思想に対して、周辺ないし第三世界にいる人々は、「翻訳的適応」、すなわち外から来るものに負けるのではなくて、外から来るものを、自分達が持っている固有の制度とか慣行を通して解釈し翻訳し、ずらしながら自分達に合ったものに節合させて新たなものを作っていくというやり方で対応していると書いております。それが、圧倒的な力を持ったグローバル化の動きに直面するオセアニア先住民社会の一つの在り方なんだということ、前川さんは言っております。

今日の発表では、マツクの例を出しながら「戦略的節合」ということを提示されました。そこで、前川さんには、今までのご自身の研究の成果を踏まえて、戦略的節合というタームが具体的に何を指すの

か、どういう現象を理解する方法なのかということをもう少し説明していただきたいと思います。

それから、栗本さんのご発表について。司会の大杉さんがまとめてくれませんでしたので私も困っているのですが、紛争、これは一般にいうところのグローバリゼーションじゃないですよね？ しかし、ともあれ、栗本さんが取りあげたアフリカ・スーダンに居住するパリ人は、彼らにとつての今までの生活体験とは全く違う、政治的、あるいは経済的、思想的、宗教的な大きなものが外から来た時に、「負け」てしまい、難民になってしまふんですね。そして、紛争が終わつた後、一部の人がそのまま残つていたパリ人のホームグラウンド、故郷に、外に逃げ出して難民を経験した人達が帰つてきて新たなローカリティ、コミュニティ的なものを作ろうとしたけれども、それは全く異質なものになつてしまつたといふことですね。村の中に、紛争前までにはなかつた四つの階層が新たに出現してしまつたといふわけですよ。そうすると、こういう社会の在り方というものは、どう捉えれば良いのでしょうか？

栗本さんは、結局のところ、周辺は負けてしまふんだ、勝ち目は無いんだ、人類学のグローバルなしローカルの研究がそういう敗残者の例を研究したところで何が得られるんだ、とかなり悲観的なことを言われました。しかしながら、やはり私達が考えなきゃいけないのは、成功した例じゃなくて負けた例であつて、グローバリゼーションに巻き込まれ、対応できなくなつた人々を私達はどのように捉えていくのか、そこから何を学ぶのかということが非常に重要なことだと思います。

アメリカのスプーニイという人類学者が、植民地時代が始まる前までといふことですからおそらく一九世紀の中葉くらいまでといふことになりましたが、世界には四〇五〇〇の文化があつたと推定しています。しかし、現在では、二〇〇の文化しか残っていないと言ふんです。そういう意味で、文化の多様性の意義といふことを考えた場合に、ただ単に負けていくものが減んでしまふのを悲嘆に暮れつつ眺

めるというのではなくて、そこから私たちは何かを学ばなくてはならないと思うわけです。栗本さんは、もう少し成功した事例もあげていただくか、あるいは、負けた事例を通して何を見ようとするのかをもう少し説明していただけたらと思います。

最後に、田中さんの発表に対するコメントを致します。発表では、神、自然、そしてその両方に関係を持つ人間から成る「神—自然—人間の三角錐」という世界モデルをまず提示し、この関係が、日本のそれぞれの地方（ローカルな場）でどのような生活のあり様というものを作りあげてきたのかということとを述べられました。そして、そうした地方での関わり方というものが、昭和三〇年代の、一つは日本政府が行ったという生活改善運動によってどう変わっていったかということと話されました。先ほど聞いていてなるほどと思ったのですが、この生活改善運動にはアメリカ的な発想があったとのことですから、確かにこれもグローバリゼーションですよ。そういう動きが日本の国家経由で地方に到達した時に、先ほど言った神・人・自然という関係を具体化した、地方における慣行とか社会の統治のあり方とかが、政府主導の運動にどう対応したのかということを、今日、田中さんは報告して下さいました。

新生活運動としての保健衛生の改善とか生活改善とかは、私も小さい時に経験して知っております。それが実施されている時、地方によって対応に違いが出てきたのかどうかということは非常に興味深いものがあります。こうした、日本各地で展開された新生活運動もグローカリゼーションという枠組の中で扱いは得るのではないかということを示していただいたという意味で、田中さんの発表は非常に大きな問題提起をしてくれたのだと思っております。

簡単ですが、以上、四人の方のご発表に対するコメントを申し上げます。

最後に、今一度、発表者の皆さん全員にお願いしたいことがあります。今日のシンポジウムを企画し

た上杉さんが冒頭で、私達にとつても非常に重要であると思われるグローカリゼーション、グローカル化ということに対してどう取り組んだらいいのかという問題提起をしてくれましたので、四人の発表者の方には、最初にそれについての見解を述べていただけたらと思います。